神の国は幼子のような者たちの国

ルカ福音書18:15-17

18:15 イエスにさわっていただこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかった。
18:16 しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。
18:17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」

【祈りながら考えよう】

（１）主イエスのところに幼子たちが連れて来られたのは、どんな教えがなされていた時ですか。
（２）悔い改めの祈りをした取税人が、「幼子のような者たち」とどうして言えますか。
（３）主が求めておられる「砕かれた霊・心」とは、どんな魂ですか。

【解　説】

（１）イエスにさわっていただくために

《イエスにさわっていただこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た》。

ユダヤの習慣によると、満一歳になった頃の子供が、ラビ、ユダヤ教の教師、律法の教師たちの按手を受け、祝福を受けるということがならわしになっていた。

そんなことから、ユダヤ教の教師の祝福を受けるよりも、このあわれみ深い、愛深いイエス様の手によって愛する子供の祝福を受けたい、そうせつに願う親によって幼子たちが連れて来られた。

イエスの噂を聞いた人々が、なんとかして愛する子供をイエス様にさわって頂いて祝福していただきたいと願って、深い親心をもって子供を抱き、あるいはよちよち歩きの子供の手をとってやって来た。

（２）重大な話の最中に

①マタイ･マルコ･ルカでの記事の比較

今日の聖句は短いが、マタイ福音書にも、マルコ福音書にも同じ記事がある（下記参照）。

マタイ福音書では19章13-15節

19:13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。
19:14 しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」
19:15 そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。

マルコ福音書では10章13-16節

10:13 さて、イエスにさわっていただこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。
10:14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。
10:15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」
10:16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

こうしてルカ・マタイ・マルコの３箇所を比べて読んで見ると、マタイとルカはだいたい同じであり、マルコが最も詳しく、両者にない所がある。特にマルコ10章の14節の、《**イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです**》という所と、16節の、《**そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された**》という所である。

さらに、ルカ福音書と、マタイ、マルコの方とでは記されている前の記事が異なる。後の出来事は同じであるが、前の方が異なる。ルカの方は、貧しいやもめがひたすら裁判官に願って、その執拗さにおいてついに裁かない裁判官に裁かせてしまったという、「祈り」のたとえがあって、それから「パリサイ人と取税人」とのたとえが続いており、その後にこの出来事がある。

②マタイ･マルコでは離婚問題の後に

マルコ、マタイの方は、その前にあるものは「離婚問題」である。夫婦が離婚していいか悪いかというこの難問をもって、パリサイ人たちがイエスを試みようとしてやって来た。イエスはそれに対して、モーセは、男の心がつれないゆえに、女を楽にさせるために離縁状を書いて妻を出すということを仮に許した。しかしわたしはそうではない。離婚なんてことは全く考えられないこと、あり得ないことだと言われた。

《しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。それゆえ、人はその父と母を離れ、ふたりは一体となるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」》（マルコ10:6-9）

これがイエスが厳然（げんぜん）として話された言葉である。神が合わせた者はもはやふたりではなく、一体なのだ。これを離すことは、一体となった者を殺すことである。《人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません》。

結婚はこのように神によって与えられ、「神の宇宙創造の秩序」に基づいてなされるもの、神によって一体として合わされたものである。これを離すことは、神に対する決定的な反逆である。

《だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです》（マルコ10:11-12）

このように厳（きび）しく、離婚ということはあり得ないことをイエスは語っておられる。ただ例外がある。相手が死んだ場合と、姦淫によってこの事態を破壊してしまった場合である。それ以外の出来事においては離婚ということは全く成立しない。

こういう人生における「重大な問題」をイエスが語っておられる所に、人々が幼子を連れて来たというわけである。それがマタイ、マルコの方の前後関係である。

③ルカでは取税人の祈りの後に

ルカの方では、二つのたとえ、「祈りについてのたとえ」と「だれが義とされるかということについてのたとえ」の後にこの出来事が記されている。どちらにしても、大人の心には「重大な事」をイエスが語っておられた。そういう重大な話の最中（さいちゅう）に、幼子を連れて来たということである。

弟子たちが、幼子を連れて来た親たちの前に立ちふさがって、彼らを主イエスに近づかせないようにしたのには上記のような理由がある。弟子たちは、主イエスの御心と思い込んで、幼子を連れて来た人々をしかりつけたわけである。

（３）主イエスの御心

①悔い改めた取税人は幼子のような者である

主イエスはその幼子たちを連れて来るようにと言われた。「神の国は、この幼子のような者たちの国です」と語られた。幼子のようにならなければ、神の国に入ることはできない。

それでは、幼子のようになるとは、どうすることか。それは「悔い改めて、…素直に神の国を受け入れる」ことである。

ルカはこの出来事を、「パリサイ人と取税人」が祈るために神殿に行ったというたとえ話に続いて記しているところに、その意図と目的があったと言える。

つまり、「神の国は幼子のような者たちの国」であり、「幼子のような者たち」とは、「悔い改めて、…素直に神の国を受け入れる者」であり、あの神殿で祈った「取税人」にほかならないというのが、ルカの解説であると言ってよい。

私たちは、祈るために神殿に行ったパリサイ人のように品行方正で、立派な信仰生活をしている人が神の国に入れるのだと思いがちであるが、そうではなく、大人であっても自分の罪を正直に認め、悔い改めて、神のあわれみを求める者こそ、「幼子のような者」なのである。

②主が求めておられる魂

自分が罪人であるということを示されたら、それを素直に受け入れ、悔い改めればよい。子供は決して物事をこねくり回して考えたりはしない。これが詩篇51篇17節（**神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません**）に記されている「砕かれた霊・心」であって、主が受け入れて下さる。主が求めておられるのは、このような魂である。

子供は屁理屈を言ったり、言い訳をしたりしない。人の言うことを疑ったりしないで、素直に受け取る。神の国に入るには、その素直な心が必要なのである。

ある所までは批判精神を持って聖書を研究することもよいが、一旦これが真理であり、これ以外に救いはないということが分かったら、素直にそれを受け入れなければならない。

子供が親を知ろうという場合、親を素直に受け入れる。そのような態度以外に神を知ることはできない。神は私たちの造り主であり、私たちを救うために御子を犠牲にするほど私たちを愛して下さった救い主である。このお方を知るには、幼子のように素直に受け入れる以外にはない。